

藍染職人 小沼雄大さん

しょうえんぼく 松煙墨を使った独特の藍染技法

江戸時代から続く伝統工芸の黒羽藍染。

今、黒羽地区でその伝統技法を受け継いでいるのは、小沼雄大さんだけだ。若き藍染職人は、伝統を守ること、そして伝えることの重要性和日々向き合っている。

スニーカーと藍染

東北新幹線・那須塩原駅から車で東南方向に15分ほど。国道294号線と県道182号線が交わる角に、黒羽藍染“紺屋”の店がある。

20年ほど前に建てられたという店は、古民家風のつくり。店内に一歩入ると、黒羽藍染という伝統工芸品を売る店にいかにもふさわしい和の雰囲気漂う。

だが、店内の一角に置かれているのは、1足のスニーカーだ。見ると、白地のキャンバス地に型染の手法でデザインした模様が施されている。

「8代目を継いだとき、改めて店内を見まわしたら、自分が客だったら欲しいと思えるものがありました。だから、自分と同じ世代の人が興味を持ちそうなものをつくろうと考えたんです」

と言う小沼雄大さんは32歳。8代目を継いだときはまだ24歳だった。

何をつくれればいいか、

ヒントを得るため小沼さんは京都へ2泊3日の旅に出た。そしてそこで見つけたのが草木染のスニーカーだった。

「靴を染めるのもありだ」

そう思った小沼さんはすぐに大田原に帰り、新品のスニーカーを数足買って試してみた。黒羽藍染は型染が基本。だが、立体物のスニーカーに型紙は使えない。そこでまずデザインを考えると、スニーカーのキャンバス地に直接、糊を塗った。乾いてから染料に浸ければ、糊を塗った部分だけ染まらずに模様が描けるの

自分には何ができるか。「染めるだけじゃなく、柄も付けられる」と答えを出したスニーカー。



だ。もちろん最初はうまくいかなかった。それでも試行錯誤し、何足かのスニーカーをダメにしてようやく納得いくものをつくることができた。

「若いお客さんは、スニーカーを見て『いいね』『かっこいい』と言ってくれます。手軽に買えるお土産として今は団扇やコースターも染めています。昨年からつくっている日傘はとても好評です」

藍よりさらに濃く深く

藍染は、植物に含まれるインディゴという染料で生地を染める草木染の一種である。ジーンズを染める染料にもインディゴが使われている。

日本の藍染は、蓼藍の葉を発酵させた染料に石灰や日本酒を加え、甕の中でさらに発酵させた染料を使う。

こうした藍染は全国に見られるが、栃木の伝統工芸である黒羽藍染には、他と違う大きな特徴がある。蓼藍の染料で染める



おぬま・ゆうた 1985年、栃木県生まれ。24歳のときに家業の黒羽藍染紺屋を継いで8代目当主に。今、店の経営は母親の京子さんに任せ「自分はおのづかりに専念できている」という。「職人としてはまだまだ」と謙遜するが、京子さんは「もう安心して見ていられる」と目を細める。妻の裕美子さんとの間に一男。趣味は、旅行と写真。

前に、松の根を燃やしたときに出る煤を墨にした松煙墨を入れた豆汁こぼりで下染めをするのである。豆汁は大豆を水に浸し、搗り潰したものだ。

「豆汁はグレーの染料のようなもので、一度これで染めることにより、深く濃い藍の色に染めることができます。色が濃い分、黒羽藍染は色が長持ちすると言われています」

栃木県北東部の黒羽地域は、江戸時代、那珂川などの河川を利用した舟運が盛んであった。周辺の山林で伐採した木材も河川を利用して運ば

れた。そのため多くの材木商がこの地域に拠点を構え、彼らのまとう半纏はんてんも黒羽藍染で染められたものだったという。

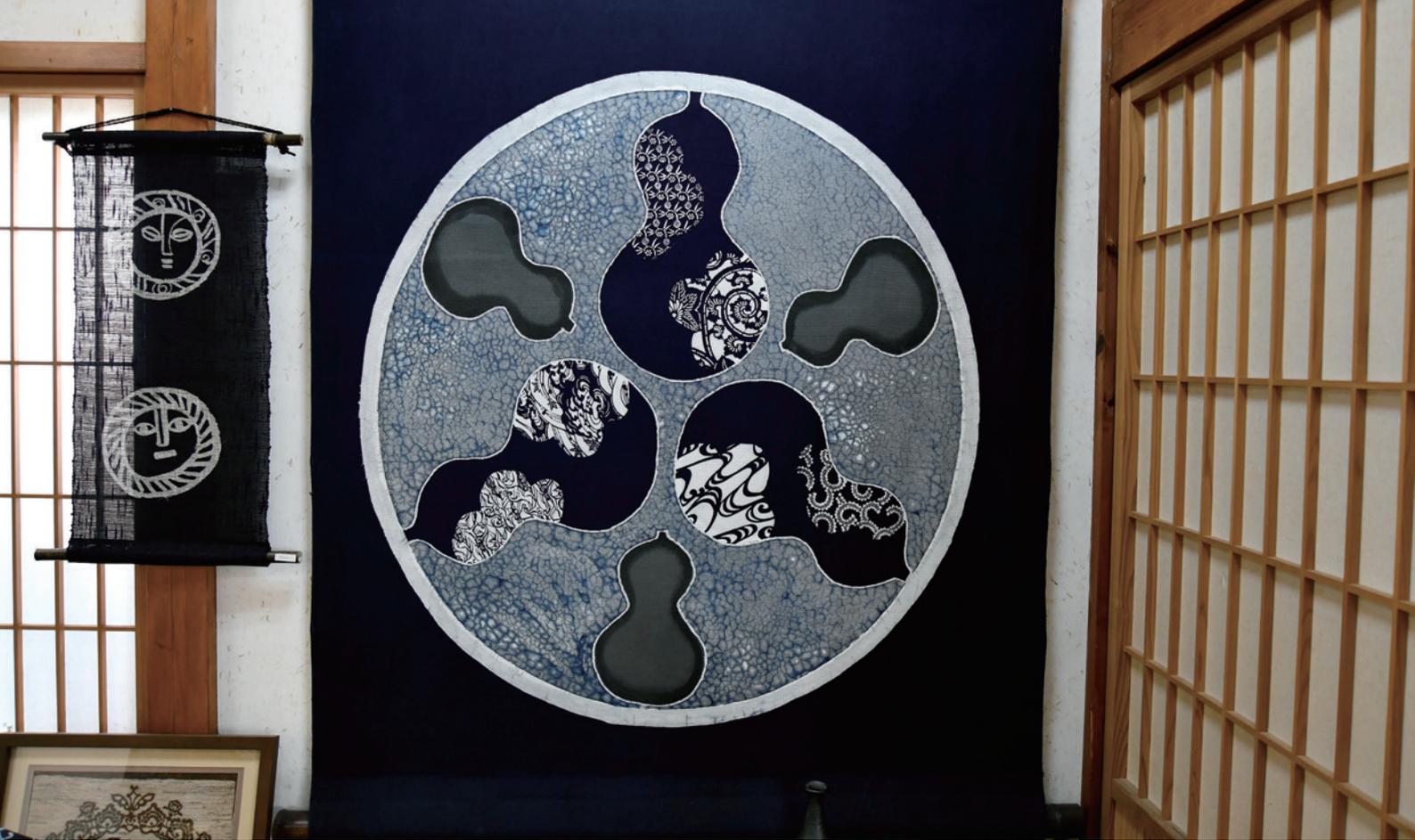
黒羽藍染紺屋の初代、紺屋新兵衛がこの地で藍染を始めたのは文化文政の時代（1804～1829年）と伝えられている。小沼雄大さんはその初代から数えての8代目である。

かつて当地には、黒羽藍染を生業とする家が少なからずあった。しかし現存するのは小沼さんの家のみである。

「途中で諦めるくらいなら最初からやるな」

「7代目の父から家業を継げと言われてきたことは一度もありませんでした。祖父からは毎日のように言われていましたが（苦笑）。でも、高校を卒業したとき、ごく自然な流れで継ぐことに決めました」

と語る小沼さんによると、父親の重信さんが黒羽藍染の職人になったのは30歳のとき。祖父の寅三郎さんは典型的な職人氣質だったようで、



重信さんには藍染の技法などを一切、教えなかったという。そのため重信さんは見様見真似の独学で黒羽藍染の技法を身に付けた。だからなのか、小沼さんが職人になると言う「俺には教える技術がない」という理由で、1年間、東京にある藍染工房の教室に通うことを勧めた。

「東京の師匠は、着物を染める藍染で、うちは暖簾などが中心でしたから細かいところはいろいろ違いがありました。師匠の豆汁には松煙墨も入っていませんでした。だから豆汁の作り方などは父から教わりました。師匠からも父からも『途中で諦めるくらいなら最初からやるな』と言われ、逃げ道がない感じでしたか

父、重信さんの作品。藍染だが、小さい瓢箪柄は松煙染めしている。藍色と黒を使い、色の広がりを感じさせる仕上がりになったもの。

ら必死でした」

そして修業を終えて帰郷し、職人として働き始めて数年後、重信さんが病に倒れて他界し、小沼さんが8代目となったのだった。

「私が家業を継ぐことになったのがうれしかったのでしょう、亡くなる前の1年間は、仕事を全部任されていました。今思えばそれがよかったです。自由でいろいろなことができました。でも、8代目になったときは

(写真左) 糊を塗って型を生地に写す。(写真右) 豆汁を下染めする豆入れ作業。塗っては天日で乾かしてを最低3回は繰り返す。

すごいプレッシャーでした」

200年続いてきた伝統工芸を引き継ぐことになったのだからそれも当然だ。しかし小沼さんはそのプレッシャーに押しつぶされることなく、伝統を守りながらスニーカーなどの新しい分野にも挑戦していった。取材に訪れたとき、小沼さんが着ていたシャツも、黒羽藍染の技法で染めたものだった。最近、ちょっとしたブームになっている御朱印帳入れもつくっている。

蓼藍の栽培にも挑戦

一方で地元の中学校で定期的に藍染教室を開いたりもしている。





「中学校の藍染教室は父がしていたもので、父が亡くなった後、続けてほしいと学校から声をかけていただきました。子どもたちが少しでも藍染に興味を持ってくればという気持ちでお引き受けしています」

東京にある雑貨店と共同で展示販売会を開いたりもしている。また星野リゾートの界 鬼怒川は、全客室に黒羽藍染のベッドライナーなどを設え、ホテル内に黒羽藍染のショップも設けている。黒羽藍染紺屋は大田原市内の店で販売しているだけで卸は一切していないが、唯一の例外が星野リゾート界 鬼怒川なのだという。「蓼藍の葉は徳島産のものを仕入れていますが、数年前からは自分でも

染めの様子や商品の紹介はInstagramやフェイスブックでも発信。SNSを通じて遠方から訪れるお客さんもいるという。

栽培をしています。葉を乾燥させず、生の状態でミキサーにかけたものでも染めることができます。これからいろいろ試してみようと思います」

黒羽藍染を少しでも多くの人に知ってもらいたい。そんな想いが小沼さんを突き動かしているのだろう。だが、黒羽藍染紺屋は、弟子を取らないことが伝統になっている。中学校の藍染教室に興味を持った子が弟子入り志願してきたらどうするかと

(写真左) 約200年前から使っている藍甕に浸して染色をする。(写真右) 長男と妻の裕美子さん。今は育休中だが縫製を担当。

尋ねても、小沼さんはきっぱり「断ります」と言い切った。小沼さんには2歳の長男がいるが、将来家業を継ぐとは限らない。

「もし長男が継ぎたくないと言ったらどうするのか」

いささか意地の悪いそんな質問に、小沼さんは、「200年続いた黒羽藍染の歴史を自分の代で途絶えさせたくはない」と言いながらも、結局答えは返ってこなかった。

まだ30代の若さだから、この答えを出すまでにはまだ猶予がある。伝統を守りながら新しい道を切り開いてきた小沼さんのことだ。きっといつかこの難問にも、明確な答えを見出す日が来ることだろう。

